



← 白丸内
悪霊を封じ込めた
パドマサムバヴァの像

8世紀のチベットに仏教を伝えたパドマサムバヴァという密教行者が、チベットの悪霊を封じ込め、チベット全土に結界を張ったことで、その後、チベットは仏教王国として千年以上も守り伝えられてきたという霊的な歴史があります。残念ながら、20世紀初頭にダライラマ13世が亡くなられ、14世を見つける間また14世が成人する間の摂政の政治家が、この悪魔信仰を行い、パドマサムバヴァが結界を張ったお堂やストゥーパを全て壊してしまいました。そうしたら十数年後に、中国共産軍がチベットを侵略し仏教を破壊してしまったという歴史的事実があります。とても残念な悲しい事実です。

このパドマサムバヴァの憤怒の仏像は、魔を調伏する力強い霊的パワーを持っていると言われていて、その仏像がアレフの祭壇の上に祭られているということは、とても皮肉です。私から見ると「魔」を封じ込める霊力が、アレフを監視しているということが不思議で面白いと思います。彼らは仏教を信仰し、特にチベット仏教のマハムドラーやポワというキーワードを、全く中身は違いますが、使い祈祷をしています。本来の密教的霊力に封じ込められていると見ることもできます。

Xディに話を戻しますと、彼らは今現在も、麻原の存在を使って次男を持上げて教団をまとめようとしています。今、麻原自身は東京の小菅拘置所で服役していますが、Xディによって死刑後の「麻原の霊体」が教団内で実体を持つようになるのではないかと心底危惧します。親さんやご家族が実際に現役信者の子どもと対話するときに、その「麻原の霊体」をどう理解し、実際にどのように対話をしていったらいいのかを、今日のテーマの一つとしてお話したいと思います。

公安調査庁の「治安フォーラム」という資料の中で、アレフの幹部二ノ宮について面白いことが書かれています。去年出版された三女の手記について、「二ノ宮は『三女は悪魔にとりつかれているという共通認識がアレフの中で形成された』と主張している」と書かれています。魔にとりつかれてるとか、地獄に行くとかという、そういう思考の根幹、宗教性は依然変わっていないのです。閉鎖的になればなるほど、そこから抜け出せなくなって、更にそこに拍車がかかっていると、この1行で実感しました。彼らの心を占めている一番の根本的思考にあるものが、霊的な存在です。

その裏返しが「救済」というキーワードです。公安フォーラムの記事に、二ノ宮が26年12月におこなった説法があります。

「まだまだ救済は遅れています。全然シバ大神の計画した救済のスピードからすると、カメよりアリくらいかな。それくらいのスピードでしか進んでいません。全国の皆さんも救済の魂を燃やして、飛躍的に信じられないくらいの数字が表れて、こんなに大きく

なりやがってと言われるくらいがいいですね。」とっています。

この「救済」というオウムの思考は非常に危ないキーワードです。私たちの社会からすれば余計なお世話です。救済の元が霊的な存在にあるのなら実行的な行動は、オウム事件前での目標ならば「日本シャンバラ化計画」です。教団の中で、今もその救済という思考原理が日本シャンバラ化計画のままなのか、それとも違う計画に置き換わっているのか、それは重要な問題です。実は腹の中はそのまま「日本シャンバラ化計画」を継続しているのかとするならば、これこそが問題にすべきことだと思います。彼らの「救済」とは、一体何なのか。たった二文字の「救済」という言葉ですが、事件前も事件後も、彼らが今も使う「救済」の意味をもっと深く捉えるべきではないかと思っています。

2.目に見えない現象 虚妄の霊：霊的な視点から

本書の執筆にあたってオウムの霊的な視点を絡めて書いたので、非常に難しい内容になってしまったと思っていますが、実はもっとオウムの霊的な面を切り込みたかったところがあります。今日はこういう場ですので、霊的な視点からもう少し深めて語りたいと思い、皆さんと一緒にオウムの実態を考えていきたいと思っています。

レジュメの2枚目に「神秘体験と精神の物質主義」「アストラル界」というキーワードがあります。皆さんも「アストラル界」という言葉をお子さんから聞いたことがありますか。アストラル界というと、瞑想している時、体はここに居ながらフワッと飛びたいのが出て、いろんな所を見たり超能力使ったり、パワーを出したりというイメージがあります。またオウムのビデオでもそのような空を飛んだり超能力を使ったりというシーンがありました。これがまさに彼らのとらえている霊的世界の「アストラル界」と考えると分かりやすいかと思っています。

以前カウンセリングに関わったA君のケースですが、彼は「頭の中で何かが語り掛けてくる」と言っていました。最初はそれが麻原の霊体だと彼自身も思ってたそうですが、それがだんだん尊師以上の霊的存在が語り掛けてくるようになったと真顔で言っていました。

カウンセリングの中で私に腹を割ってその霊的存在の話をしてくれましたが、この「霊体」のことは今も親にも話せないし、話しても分ってくれないし、誰にも話せなくてずっと悶々としてると言います。仕事を見つけようとしても、その霊的なものが、これをやれとかここはやるなとか、そういうふうに語り掛け指示をしてくると言います。

それは妄想であり虚妄の霊だと切り捨てることは簡単ですが、オウムの中で埋め込まれた、また共同幻想として実態視までしてしまったその霊的思考は、残念ながら彼らには社会現象や社会常識よりも大きな実体、実感を持っているということ、まず理解すべきだと思います。そして、それは、いつか誰かがこの霊的な精神状態を客観的に整理整頓しない限り、その意識状態から解放されることはまずないと思います。

この霊的思考は、皆さんのお子さんもほぼ全員そうだと思ったほうがよいかと思っています。表向きは普通に生活していても、頭の中、心の中の精神作用は全てこのアストラル界での霊的な力で動かされていると見るべきだと思います。親や家族に接触があったと

き、語り掛けるその心の奥にあるものが、オウムで教え込まれた「アストラル界の霊的な存在」を抜きにしては語れないということを、まず知っておくべきです。

このアストラル界の霊的世界というのは、どういうふう形成されていくのでしょうか。事件以前は、イニシエーションというドラッグ、LSD体験でした。彼らは神秘体験と言っていますが、ドラッグ体験というものが、一番の根っこにあるものです。この部分は本書に詳しく書かれています。

では、事件後に入信したドラッグ体験もなく、薬物イニシエーションも受けていない人たちが、どうやってオウムの霊的世界観のアストラル界を受け入れているのでしょうか。それは、未だに教団内で使っているビデオや説法テープ、これが大きな力を持っているのではないかと思います。本や文字で読む印象や理解と、実際の麻原の生の声を聞く、ましてや映像でその姿を見るという体験とでは、全くインパクトが違います。教団内に今後もこのビデオやテープが残る限り、閉鎖集団の中での共同幻想、妄想、本書というならば「虚妄の霊」の呪縛からは解放されることはないという確信があります。

麻原が事件前に生き生きとして威厳を持って語る映像の中で、「最終解脱を！」「救済だ！」などというワンフレーズ、ワンキーワードが意識の深いところに強烈な印象として刻まれ、教団内でそのままの世界観と行動を信者たちで共有し、信仰を深めている。その閉鎖空間では、麻原の体が無くなろうが、拘束されていようが、音声や映像の中では生き生きとした霊的存在として、まさにオウムのアストラル界に実在している現実が怖いことだと思っています。これが、虚妄の霊です。

霊的な存在を理解することは、非常に難しいです。般若心経に「色即是空、空即是色」という有名な一節があります。目に見えない世界は必ず現象化していると語られています。ですので、心の意識空間、その霊的なものも現象化していると考えます。現象化したものは、その意識空間の働きの相互作用であるというのが、「色即是空、空即是色」の意味です。仏教の教えでは、勿論、現象も意識空間も共に「空」なのですが、しかし、ここでの問題は、オウム信者の心の中の精神構造がどのように成り立っているのかを見抜くことがポイントなのです。

グルからの「霊的エネルギーの注入」「シャクティパット」「ヘッドギア」という、事件以前から教団の中で行われていた重要な儀式がありますが、まさにこの霊的エネルギーが、アストラル界やオウム信者の意識を形成するものだとすることをよく見据えて、これから更に取り組んでいかなければいけないと実感しています。目に見えないがその精神構造を「虚妄の霊」というキーワードで語ったのです。

先程の写真の話に戻りますが、オウムの宗教活動の実体というのは捉えにくいのですが、「霊体と祭主と祈り」の視点から見ると、この写真1枚から、かなり読み取れるものがあると思います。

この写真で読み取れることは、教団内で黒魔術を行っているということです。麻原の霊体であるシバ神に対し、教団幹部ないしは祭主が、写真を串刺しにして祈祷するという儀式は、まさに呪いの儀式、黒魔術です。黒魔術というのは古代から行われていますが、仏教では禁止されています。なぜかというと、黒魔術は閉じた宗教行為だからです。

閉じた宗教行為には、仏教でいうところの悟りや解脱は絶対にあり得ません。閉じるということは、外と内、世界と自分、主体と客体を分け隔てています。主体と客体を分けるその二元的意識構造が、実は煩惱や無明や迷いや問題を引き起こす一番の根源であるわけです。

つまり、言葉や行動という表面の現象だけを見るのではなく、「霊体と祭主と祈り」という視点で、その行動の背景にあるものを一緒に見る訓練をされておくといいと思います。それは現役信者が「何を祈り、誰に祈り、どのように何を祈り、何を行おうとしているのか」ということです。日頃からこの視点で見るようにしていると、いざ子どもと会って話す機会がある時に、言葉の端々から目には見えない精神構造を少しずつ読み取ることができます。一朝一夕でできるものではないですが、そういうことに配慮して、これから迎えるであろう対話の準備をされるとよいかと思います。

3.閉じるから開くへ

次のキーワードは、「開くか閉じるか」です。

宗教団体や様々なグループは数多くありますが、安全な集団なのかそうではないのかの見分け方があります。シンプルな方法として、「開いてる集団」か「閉じてる集団」かです。安全な集団はいつも外部に対して情報も行動もオープンです。また会のメンバーに対しても入会も脱会も本人の意思で自由です。一方で閉じている集団は、外部と内部を分けて、外に対して警戒したり攻撃したりということが、カルト集団の危ないところ です。閉じてる宗教の視点からは、オウムなどは一番分かりやすい例です。例えばアレフは開き直って、公安調査庁に挑戦するような言動をしたり、ひかりの輪に関しても、表向きは開いてるように見せかけながらも、嘘を言ったり違う報告をしたりしています。

集団がそうなので、集団を構成する信者の心も閉じています。ですので一番のポイントとなることは、集団をどのようにオープンにさせてゆけるのか、またその信者の心をどのように解放していくのかが問題になってくると思います。

オウムのいう神秘体験とは、LSDの薬物イニシエーションです。LSDを摂って、コンテナの中で地獄や麻原のビデオを見せられれば、まともな人でもおかしくなるぐらいの強烈な体験です。これは、まさに閉じられた空間の中で起こる心の現象です。

このLSD体験は、60年代70年代のヒッピーがよく言いますが、set & setting（セットアンドセッティング）「期待と状況」でどのようにでもなるのです。開かれた青空や地平線が見える大地、お花畑という開放空間でLSDをやると意識が解放され、いわゆる悟りに近い体験をされると言われています。逆に、コンテナのような閉鎖空間で薬物をとると、強烈な最悪な印象体験、いわゆるバッドトリップを体験します。閉鎖空間の中で地獄の映像を見せられたオウム信者の心の中を深く見ていくと、その心はずっとコンテナに閉じ込められ、バッドトリップをしたままだと思います。体はどのような空間にしようが、アストラル界の霊的存在に拘束され、そこに閉じ込められた心は、社会の中で何をしようが外世界を見ることのできない意識の閉鎖空間の中にいるのです。そして、オウム信者はそのバッドトリップ体験から救われたいがために、教団の

中でオウムの教義や瞑想を真剣に学んでいるのです。

ではどうしたら、その心のコンテナから出てこられるか。私は本書の中で、一貫して言っています。それはオウムのアストラル界という霊的世界、オウムの霊的世界観、そこを突き抜けて、広い空間に行くしかないと言いつけています。心のコンテナを開けて、その霊的なもっと広い本来の青空の空間に、自らが1歩足を出してゆくしかないと言っています。では、どうやって本人が足を出すことができるのか。閉ざされた意識空間にいる本人が、自ら心の扉を開けることは、非常に困難です。そこで重要なのが、親や家族、またはカウンセラーという外の存在が心の扉をロックします。開けるのは本人です。本書では、それを3つのプロセスで説明しました。それが短期、中期、長期のビジョンのプロセスです。

その中で重要な一つのポイントは、教団内でしか生きられないと思い込んでいる信者も、外の世界でも何でもできると伝えることです。外の世界でも修行や精神の学習ができる。外の世界でもアルバイトや派遣はできる。そして外の世界で、本来の開かれた明るい霊的エネルギーは受けとることができることを理解できるように語りかけてゆきます。

では、外の世界でも何でもできるという可能性を、どのように伝えていけばいいのか。開かれた方向に本人が1歩足を踏み出すことができるのか。その道筋は様々で、十人十色、百人百通り、それぞれの今までの過去の関わり方の積み重ねですので、一人ひとり方法が違います。万人に共通する方法論はありません。その一人ひとりの物語を解き開いて、可能性への道筋を見出す作業が重要です。そして、その道筋に対して、実際に行動します。コンタクトしても返事がなかったり、逆に二度と手紙を送ってくるなという連絡があっても、それは実はもう開かれた方向だというふうに捉えて、1歩でも10センチでも1ミリでも開かれた方向に行く努力しかありません。仏教用語で言うならば、方便力（ほうべんりき）と言います。閉じている所から開いている所へ心の方向性、道筋をつけるということ、どこが最終目標かというポイントを明確に持つことです。

それが短期ビジョン「対話ができること」、中期ビジョン「脱会届けを出すこと」、長期ビジョン「社会復帰」のプロセスです。

その方向性にとっての一番の鍵は「コンタクト、対話」です。最初は本音で話せなくても、否定されても、それがひとつの対話であると理解します。手紙が送り返されてきても、それがひとつの対話のメッセージであると理解します。コンタクト、対話を持つというのが一番の鍵だと思います。

プライベートなことですが、私が結婚してから20年間約束してきたことがあります。それは夫婦の間には以心伝心は無いから必ず話をしようということ。関係がギクシャクしたり否定的になったときほど、話をするようにしています。夫婦だから親子だから伝わるはずとか、分かってくれるはず、その「はず」はないと思っておいた方がいいでしょう。「以心伝心は無い」と思って、コンタクト、対話、行動の中で自分の気持ちを伝えること。メールでも手紙でもいいので、言葉や文字で伝えることが一番重要だと思います。

また、親として心の深いレベルで子どもを受容する受け入れることは、大切な姿勢だと思います。どのような手段を使ってでも、子どものために脱会活動をするんだという信念を持ち続けることも重要です。先日、家族会に入っておられない親さんから連絡があり相談を受けましたが、「もう年なので諦めた」という方がおられました。私は「非常に難しい問題ですが諦めないでください」「諦めた時に思いが途絶えます」と言いました。そういう方にこそ「家族会に入り、仲間や協力者、助言者の力を得るようにしてください」ともお話ししました。

疲れたとか、もういいとか、そういう風に思われる親さんともお話ししましたが、「諦めないでください」、とにかく問題に対して自分の心の思いを、ちゃんと行動に表してくださいと、ずっと言い続けてきました。心にゆとりを持つために、時には旅行したり、気分転換も必要でしょう。

この問題には、瞬発力よりも持久力が大切なのです。諦めない持久力です。そして、今だという時に思い切った行動という瞬発力が必要になりますが、それまでは、小さな糸を手探りで手繰り寄せる持久力忍耐力が重要です。これならば、体力が衰えても亀の甲より年の功という精神力や包容力で対応できると思います。瞬発力が必要な時には、他者の力をお願いして行動すれば良いと思います。先が見えなくてどうしていいかわからないというよりは、今までの脱会事例の中で、ここまで来れたとか、ここにいけばなんとか次が見えるんじゃないかなどと先が見えるという意味では、短期、中期、長期のビジョンの捉え方は有効だと思います。まだまだ先が見えないと思っても、飛び越えて状況がやってくるというケースもありますし、突然展開があったというケースも本当にあります。それも様々だということです。

本書の副題を「脱会カウンセリングの仏教心理学の実践事例」としましたが、私自身これが脱会カウンセリングの全てのマニュアル本だとは全く思っておりません。これを読んで、この通りにやれば何とかなるとは思わないでください。統一教会やエホバの脱会カウンセリングの事例レポートや書籍はいくつかありますが、オウム真理教の脱会カウンセリング事例は、今までありませんでした。これは私自身の経験をまとめて脱会カウンセリングの中でのプロセスを提示した一つの事例です。この試みを機会にオウムの脱会カウンセリング事例が多く出てくることを願っています。

4. 家族会の存在 集合知の重要性

今の教団で何が起きているのか、現象も精神構造も含めて把握するために、皆さんがお子さんに接した時の一つ一つの情報を、会でコマを並べてみると、また違う全体像が見えてくるんじゃないかということ、以前からずっと話をさせてもらっています。

事件直後、脱会した信者や脱会しようかなと迷ってる信者、その一人一人にカウンセリングしたり、話をしたりしてゆくと、個々人には重くて深い重要な情報が見えてきます。そして、そのような個別なピースを集めて全体像を推測してゆくと、今の教団はこうなってるんじゃないか、また、こういうふうに進むんじゃないか、と分析できます。つまり、個々の情報を複数合わせてゆくことで、今まで見えてこなかった全体像や方向

性に気がつくことがあるのです。今までもこのような集合知によってかなり脱会カウンセリングで成功したケースがあります。また教団の動きを先読みできたこともありました。

皆さんがお子さんとコンタクト取った時や、会いに行った時のさりげないワンシーンの中に、実は読み取れば読み取るほど、いろんな情報が含まれていると思います。ちらっと見ただけで、はっきり記憶に残っていないかもしれないけど、そういうピースを集めることによって現状を分析して把握できる、そういうマッピングという作業は、家族会ならではだと思えます。

家族会の中で、集合知、みんなの知恵や情報を集めてマッピングをして、そこから家族の方向性を見てゆく、全体の方向性を見てゆく、また個別の対応に当てはめていくという、そういう活動は今も生きています。家族会での積み重ね、データベースが非常に有効だと思います。そしてその全体像をちゃんと分析して、行動する。これは、ぜひとも実現していただきたいと思えます。

特に今の教団の主流派をつかもうとしている二ノ宮の存在は、かなり分析をして捉えていかないといけないと感じます。現在の京都や北海道など非常に活発な動きの背景には二ノ宮グループがいて、それが次のステップになったとき、もっと大きな勢力になることを非常に案じているわけで、教団の調査分析は重要だと思います。

T：今、最終解脱者の麻原がいないんで、解脱の認定ができない。ホーリーネームももらえない。マハームドラーの指令、ましてやポワ、殺すという意味のポワもできないし、死んだ後に魂を持ち上げる儀式もできない。正大師とかも能力あると言われましたが、やっぱり最終解脱者が出てこないと困るということから、次男なりを最終解脱者として出さないとならないのか。もしくは、なんか別の形があり得るのか。承継者は長男、次男だと麻原は獄中説法で言ってましたし、母親は次男を早くさせたがってる感じはするんですけど。

林：私もT先生言われたような推測をしています。二ノ宮が血で継承したいというようなことを言っています。今の流れでいうと、次男を、若かろうが何だろうが、霊的継承者として祭り上げたいのだと思えます。教団内の実体掌握は二ノ宮とその次男の母親がして、ひょっとしたら教義的なシナリオライターが別にいるのではないかと、私は見えています。

ヴァジラヤーナ教学システムや麻原のテープやビデオさえあれば、どんどんそれを膨らませて、焼き直し、ちょっと編集して、解釈してゆくことはできると思います。これが一番やっかいです。そうすると、霊体と祭主と祈り方という教義体系がちゃんと成り立つのです。そして霊体は麻原、そこが一番の根幹、核になる所です。で、その継承者の地位を持つてる次男を巫女みたいな役割で祭って、それを祭るこじつけの理論をつくるシナリオライターがいれば、3つが成り立ってしまいます。私もライターでありエディターなので、それくらいは簡単に作れますが、私は頼まれても絶対にやりませんが(笑)。

実は、この教義的進化という点が一番怖いと、私は思っています。これはずっとウォッ

チしてるところですが、何ぶん、この写真1枚ぐらいしか教団内部の霊的な精神構造がわかるネタがないので、もっと公安庁の方からの情報が欲しいところですが、無理でしょうかね。

H：私、オブザーバーとして初めて参加させていただきました。皆さん方のお話を伺いながら、高齢化ということと現役信者をどうやって取り戻すかっていうところ、大きい問題だと思いました。

もう一つは、そういう状態の中で、新しい信者が増えている、若い人もどんどん入っているという状況。社会でのオウムの問題といえば、なんだかパターン化してそこでとどまっている感じがします。そういう意味で言えば、メディアやこういうことに関心を持てる人たちが、もっともっと正しく理解し、それが広がっていくといいなという思いがあります。

先生自身が怖いなと危惧を抱いていらっしゃる、そのあたりが上手く展開して広がっていくといいなと思います。社会なり人々に上手く理解してもらおう術（すべ）というか、そのところ先生のお考え伺えたらいいなと。

林：まずは危惧の方からお話しさせていただきます。実はこの脱会カウンセリングの本を出して、最初から売れないとは思っていましたが。オウム本は売れないというジンクス通り、本当に売れていません。私の友達も、オウムやカルトには興味があったり、霊的なもの精神世界に興味あるんだけど、本を読むまではいいっていうことを大体みんな言うんです。本を読んでまでオウムを理解しようという人は、本当にマニアか専門家ぐらいだと、今回実感しました。

一方で、カルトなんか全く興味もないし、もうオウムって言葉さえ聞きたくないというのが、今の社会の一般的な意識だと思っています。たぶんメディアも、取材能力がない以前に、この20年以上のオウム真理教の流れや変遷を知っている記者が少ないことが問題だと思っています。オウム問題に対して突っ込む能力がないと言った方がいいかと思いません。

H先生がおっしゃられた社会の理解度というのは、これからますます低くなるというか、もう消えていくのが怖いなというふうに本当に思っています。

でも、現実問題として、子供ともう20年以上もコンタクトできない、話もできない方々がおられます。親や家族も高齢化しています。この環境をどうしたらいいのか、私は解決の答えを持っていません。申し訳ありません。答えを持ってはいませんが、この本に書いた今までの事例を積み重ねてゆくしかないと思っています。先程言ったみたいに、私の事例一つを絶対視せずに、いろんな方々がいろんな事例を提示することが、一番だと思います。

カルト問題には専門家はいないと思っています。むしろ皆さんの経験の中に、非常に深くて貴重な事例があるはずで。皆さんの一人ひとりが1冊以上事例のレポートが書ける経験を持っておられると思います。どうぞ、各自の事例を深めて研鑽し、皆が持ち寄り分析し、各自が直面している個別の問題に対して良き結果を導き出せるようにと願っています。

そして、私はそのお手伝いを今後もさせて頂きたいと心から思っております。

アレフ、北海道と滋賀県に新施設

2016年7月15日 北海道新聞

オウム真理教から改称した教団主流派「アレフ」が、札幌市白石区に新たな教団施設を設けたことが14日、公安調査庁の調べで分かった。鉄筋コンクリート4階建てのビルで、数百人を収容でき、アレフの施設として国内最大規模という。道内には全国の信者の約2割がいて、一大拠点となっている。同庁は、新施設を足場にアレフがさらなる信者獲得の動きを強め、全国の信者を集めたセミナーを開催する可能性もあるとみて警戒している。

同庁によると、道内のアレフの施設は、同市豊平区の「札幌施設」に次いで2カ所目、全国では25カ所目。2015年2月時点道内の信者は約300人と、全国約1450人の2割を占め、その後も増えている。アレフは10年から札幌施設を使っていたが、手狭になったため、今年5月以降にこのビルを購入したとみられる。札幌施設は現在も使用されている。

同庁は14日午前10時半から、団体規制法に基づく立ち入り検査を行い、調査官21人が5時間にわたって施設を調べた。同庁によると、ビル1階は車庫で、2～4階に祭壇を備えた道場や信者の居住スペースがあった。教団元代表の松本智津呉夫死刑囚（教祖名・麻原彰晃）の写真と、松本死刑囚が説法する様子を収録したDVDがあるのを確認。施設内には約20人の信者がいたという。同庁は今後、調査結果を分析し、同法に基づく拠点施設と認定する手続きを進める。施設にいた女性は取材に対し、インターホン越しに「お答えできない」と話した。

同庁関係者によると、道内は近年、信者の増加が著しい。札幌に勧誘にたけた信者がおり、教団名や宗教色を隠してヨガ教室に誘うなどして、警戒心を解いているという。この関係者は「アレフは『地下鉄サリン事件は陰謀だ』などうそを言って、若年層を教団に引き込んでいる。松本死刑囚への帰依心は今も強い」と話す。

新施設の近くに住む町内会役員の男性（61）は「アレフが使っているなんて全く気付かなかった。施設が近くにあるのは不安だ」と語った。

地下鉄サリン事件などを起こしたオウム真理教は1988年に札幌に進出。事件後の2000年にアレフを改称した。公安審査委員会は同年、アレフを団体規制法に基づく観察処分の対象とし、同庁は札幌施設に随時立ち入り検査を行っている。

2016年8月2日 産経ニュース

公安調査庁は2日、オウム真理教から改称した「アレフ」が滋賀県甲賀市信楽町に新たな施設を造ったと明らかにした。公安庁は7月にも札幌市で最大規模の新施設が造られたのを把握しており、勢力が拡大しているとみて警戒を強めている。

公安庁は同日、団体規制法に基づき施設を立ち入り検査し、数人の出家信者の居室に使われていることを確認した。公安庁によると、滋賀県内のアレフ施設は3カ所目。
